

卷 頭 言 — 最近の木簡を取り巻く状況に思う —

かつて、平城宮跡で最も重要な発見は、木簡であるといわれたことがある。木簡によって解明されてきた成果を考えると決して過大評価ということはないと思う。これまでに平城宮跡から出土した木簡は五万点近くにも及ぶ。当初はほとんど平城宮跡中心であった出土分布も、今や全国に広がり、その出土総数は二〇万点以上という。ここまで増え続けると誰が予想したであろうか。古代史や歴史考古学の研究者にとつて、木簡は日に日にその重要性を増すばかりである。

遠い昔、高校時代に教わった歴史の先生の言葉を思い出す。「古代史は少ない文字資料の、いかに行間を読み取るかが重要で、これに対し、近現代史は、有り余る資料をいかに切り捨てて本質を見つけ出すかが重要である」、というものであった。当時、古代の文字資料は少ないのが当たり前で、その状況はほとんど永遠に変わらないものと思っていた。それが、出土木簡の登場で、いまや古代の文字資料は、他の考古資料同様に着実に増え続ける資料となった。解釈の難しい古代遺跡に直面すると、木簡でも出ないかな、などと神頼みならぬ、木簡頼みの言葉が交わされる。隔世の感である。

ところで最近の問題は、近世の出土木簡が増え続けていることにあるようだ。『木簡研究』の編集にも大きな負担となりつつあり、委員会でもしばしば議論になる。これをどう扱うかは、木簡の概念規定・範疇・取り扱いなど木簡学の基本的な考え方の再検討にもつながる。ただでさえ文献文字資料の多い時代に割り込んできているのである。今のところ政治史や制度史などとはいかにも無縁そうな近世木簡が、近世史研究者から伝世文字資料と対等に扱われるのは難しそうだ。しかし、日常生活史の復原も重要なテーマである考古学の立場では、時代・種類を問わず出土文字資料は貴重であるということ、そしてなによりも近年活発となってきた近世都市遺跡や城郭などの発掘では威力を発揮していることを忘れてはならない。

さて、木簡の重要性を定着させた平城宮跡で、地下の木簡が危ない。平城宮跡の地下を通る京奈和自動車道の計画が浮上したからだ。問題の道路は、「大和平野を南北に縦貫して京都と和歌山を結ぶ延長一二〇kmの高規格幹線道路」（建設省近畿地方建設局奈良国道工事事務所パンフレット）で、高速自動車道並みの幅員と規模を有する。木簡学会は、いち早くこの問題を取り上げた。その後、歴史・考古学関係を中心に十数の研究団体が反対などの声明・要望書を出しており、奈良市の文化財保護審議会も建設反対の上申書を市長に提出したと報じられた。

道路予定路線の一つに平城宮跡を通るものがあると聞いたときは正直驚いた。亡霊が生きていたか、という思いである。私事で恐縮であるが、一九六九年に私が奈良国立文化財研究所に勤めて最初の発掘現場は東三坊大路の現場であった。これは、東院の東張り出し部が見つかったために、当初平城宮跡の東隣に計画されていた国道二四号線を大きく東に迂回して通すことになった道路部分の事前調査であった。この変更は全国的な保存運動によるものであった。

道路完成後のこと、お客さんを案内している建設関係の人の傍で、その説明を聞くとともに無しに耳にしたことがあった。私の予想に反して、彼は文化財の悪口を言うことなく、むしろこの路線変更を、道路行政がいかに文化財を大切にし、それとの調和を計っているかを示す好例であると胸を張って強調していた。これを聞いて、平城宮跡の保存は確実なものになったという安心感を抱いたものであった。同じような計画が、今ごろになって、しかも世界遺産に登録された直後に再浮上しようとは。

道路が平城宮跡の地下を通されるとなると、木簡学会としては地下に眠る木簡をまず心配する事になる。ただ、今回の問題は、特別史跡や世界遺産として保存され、国民の間にすでに定着した遺跡で起こったことで、木簡のことだけを言っているわけにはいかない。ここでの解決方法が全国の遺跡の保存と活用に大きな影響を与えるからである。木簡が遺跡の状況と切り離せないものである以上、遺跡全体の保存と活用の問題をしつかりと視野に入れた見方が必要であろう。（田 辺 征 夫）